

猥褻な歌謡

民国七年本学〔北京大学〕は歌謡の蒐集を開始し、簡約で選に入る歌謡の資格を決めた。その三は「征夫・野老・遊女・怨婦の辞で、猥褻に涉らず自然に趣のあるもの」である。十一年に発行した『歌謡』週刊は、規約を改定して、第四条に寄稿者が注意する事項の四として、「歌謡の性質は決して制限はしない。たとい言葉が迷信あるいは猥褻に渉るものでもやはり研究の価値があるから、一緒に記録して寄稿すべきで、先に寄稿者が選択する必要はない」とした。発刊の辞の中でも特に声明して「我々は投稿者に希望する……できる限り記録して寄稿されんことを、と言うのは学術的にはいわゆる卑猥あるいは粗野ということはないからである」と言った。しかし結果はやはりかくの如しで、この一年に我々は相変わらずこうした得難いものを手に入れることはできなかった。王礼錫先生の『安福歌謡の研究』（『歌謡』週刊 22 号に転録）に言うところでは、家庭の中の伝説は一度の選択を経ているから、「男女の情に発するものは、全く聞いたことがない。」これも当然一つの原因であろう。しかしわたしはもっと重要なのはどうも記録者が過度に謹直すぎることによるのだと思う。この問題について今少し検討を加えてみて、歌謡採集の前途に少しは役に立つであろうことを希望する。

猥褻な歌謡とは何か。これは簡単な疑問のようだが、決してたやすく簡単には答えられない。大体のところを一言で言うならば、「非習慣的に性の事実に言及するものを猥褻とする」と言えよう。この範囲では四つの項目が含まれる。すなわち（1）私情、（2）性交、（3）身体、（4）排泄である。ドイツのフックス（Fuchs）などの学者は、前の三者を“色情的なもの”と称し、第四項をもつばら“猥褻的なもの”に属させ、これで原義とびたりと合うとしているが、ふだんは要するに区分しない。というのはふつう排泄作用に対する観念も大抵が色情的な分子を帯びていて、決して汚穢だけではないからである。この四項目は断定が容易だけれども、事実であるからには、当然明言できるはずだが、習慣的にはどのように言えば範囲を超えて、具合の悪い言葉になるのだろうか。この点はすこぶる即断し難いと思われる。田んぼで話されるのは日常の談話だが紳士連が雅馴でないとするもの、茶余酒後の談笑に供されるが筆墨に表せないもの、その基準はまことに一律ではない。今はただ文芸作品についてざっと調べてみて、今までこうした事柄についてどの程度寛容だったかを見ることにする。エリスによれば、イギリスの社会では、「尾骶骨の先を中心として、1尺6寸の半径——アメリカではもう少し長い——で円を描き、人々が圏内の器官に言及することを禁止する。かの雑役の胃を除いて。」中国でもしここまでゆかないのであれば、それは全くの幸いだ。

私情の詩は、中国文学では本来別にそれほど忌避されていない。一つ迂闊なことを言うと、三百篇は“聖人の刪訂”を経て、先儒が注解したのに、まだ多くの“淫奔の詩”を収めていて、道学者の口を塞ぐには十分である。譬えば「子 我を思わざれば、豈他人無からんや」というようなことは、なかなか非礼教的な色彩があるが、誰も非難したものがない。後世の詩詞にも、こうした傾向は明らかで、李後主の「菩薩蛮」に云う。

「画堂の南畔に見え、^{まみ}一晌人に^{しばし}俛りて^よ顫う。

奴は出で来たること難きが為に、郎をして恣意に憐れましむ。」
歐陽脩の「生査子」に云う。

「月は上る柳の梢頭に、人は約す黄昏の後に。」
これらは、作者の人の関係から多少の議論はあるけれども、いずれもみんなが伝誦する句である。中国人は恋愛詩に対して両極端の意見があるようだ。一つはあまりにも不真面目で、「古人が君を思い友を懐かしむのに、多くは男女の情に託した。『詩経』の詩人が邪淫を諷刺し、また淫乱狂妄に代わって自述したように」と考える。二つはあまりにも生真面目で、詩集の標題が紅粉麗情に触れているのを見ると、たちまち「自分から責め道具を掛けて自供している」のだと考える。しかし実はそれと正反対に、我々は美人香草は実は私情を寄託しているのであって、密会の約はただ白昼の夢を抒写しているに過ぎないと言うことができる。最近の学術から言えば、それは疑いのないところである。嘘を少し言うと、まるで神秘的な至情のようであり、実を少し言うと粗野卑陋な私欲のようだが、実は根底では同じであって、皆いわゆる感情の体操であり、共に許容の列にあるべきである。だからこうした歌詞は当然抹殺すべきでなく、社会的には神経が変質した道学者の他にはもともとなんの反対もなく、問題にならないと言える。

詩歌の中で性交を詠んだものはもともと少なくはない。ただ多くが象徴的な字句を用いて、譬えばキスや抱擁などのように、措辞が比較的含蓄余裕がある。こうした歌詞はだいたい私情の項に入り、すぐにはどんな区別も見出せない。ソロモンの「雅歌」第八章に云う。

「我が愛するものよ、請う急ぎ走れ、
香しき山々の上にありて鹿のごとく子鹿のごとくあれ。」

「碧玉の歌」ⁱの第四首に云う。

「碧玉 破瓜の時、相為に情は顛倒す、
郎に感じ郎に羞じず、身を廻らせて郎が抱に就く。」

いずれも一例とすることができる。直截に描写するものは、金元以後の詞曲にもよくあり、『南宮詞紀』ⁱⁱ卷四の、沈青門の「美人 寝を薦む」、梁少白の「幽会」（風情五首の一）が、多分その代表となろう。しかし源流はやはり『西廂記』にあり、したがってこうしたものの手本を探すととなるとかの「酬簡」^{かえしのてがみ}の一幕を推さざるを得ない。散文の叙述では、小説の中によく見かける。ただもっと明らさまなので、大半が発禁に遭う。これから見ると、社会は寛容になることはできず、本当に猥褻と言えるものは、ただ普通の性交を描いた文しかない。これはただ因襲的な習俗に基づいて言うに過ぎないけれども、平静に言えば、こうした叙述は、学術上ではしかるべき地位があるが、文芸となると、ちょうど飯を食う状態を平面的に描写する必要はないように、芸術家が特別に考慮する他には、やはりそうした必要はない。だから普通の刊行物がこうした文章を収めないのには、もともと正当な理由がある。ただ非売品あるいは制限のある出版物では、当然また例外である。

詩歌の中で身体の名前に言及することは、非議すべきものはないはずである。紳士の社会では「一人の人間は頭と尻尾が残っただけ」ということになって、身体の多くの部分はすでにその名を失っているのだけれども。古代文学では却ってとても自由で、「雅歌」に云うのなどは、

「汝のもろ乳房は、
雌鹿の双子なる二つの子鹿のごとし。」
「汝の臍は美酒の缺くることあらざる
円き杯盤のごとし。」

又第四章十二節以後、「わが妹わがはなよめよ、汝は閉じたる園」などという数節は、もっと普通に習見する書き方である。シェイクスピアの *Venus and Adonis* の詩の中にも類似の文があるようで、上に挙げた沈青門の詞にも言及があるがもっと拙劣である。大抵そういった字句はもともと忌諱する必要はないのだが、ただ措辞の巧拙によって優劣が別れるわけだから、たとい一篇全体が詠嘆であっても、直接性交に触れなければ、排斥の理由はないようである。もし一々問題にするなら、勢い必ず現代の生理教科書のように一章を削らなければダメだということになってしまう。それは実に逆に性意識が変態的に強烈であることを示すに足るわけである。

およそ大小便などのことに言及するのは、普通はだいたい汚穢だと思われているが、実はやはり猥褻に属する。というのは臀部も“色情帯”であるから、大小便に関しては多少とも色情の分子を含んでおり、痰や汗などについての観念とはやや違う。中世の禁欲家が人間の卑小を宣告するのに、いつも大便と小便の間から生まれる (*Inter faeces et urinum nascimur*) と言ったのは、十分にこのことを表している。滑稽なわらべ歌に童話そして民間伝説では多くが大小便に言及しているが、汗に垢・痰・唾は極めて少ないのは、猥褻は笑いを引き起こせるが汚穢はそうではないからである。たぶんドイツのグロス (*Groos*) の言うように、人間は性に関する暗示を聞けば、むず痒い感覚が起こり、爆発して笑いとなって、性的興奮に変化しないようにするのだろう。さらに別の面から、我々も大小便と性との相関を読み取ることができる。上に引いた「雅歌」の臍を詠んだ句、およびイギリスの詩人ヘリック (*Robert Herrick*) の *To Dianeme* の詩の句に、

“Show me that hill where smiling Love doth sit,
Having a living fountain under it.”

と云うのはいずれも好例である。中国の例はまだ見つからないが、戯花人が著した『紅樓夢論贊』のなかに「賈瑞贊」があり、その数には入るだろう。だからこの類のものは、性質は身体を詠んだものとほとんど変わらないが、やや曲折があり、したがってこの関係はあまり明瞭ではない。

上に述べたところから見ると、この四種のいわゆる猥褻の文詞の中で、ただじかに性交を言うものだけが、いささか「具合が悪い」と言えるが、そのほかのものは場合によっては措辞が粗俗なのであまり雅馴ではないと思われたりするが、要するに排除消滅させる必要はない。本会が蒐集した歌謡の中には、あるいは得難いがため、あるいは寄稿者が慎重なため、この類の作品が極めて不足している。これはとても残念なことである。ただ白徑天先生の「柳州情歌百八首」、藍孕欧先生の「平遠山歌二十首」、劉半農の「江陰船歌二十首」ⁱⁱⁱなどは、私情歌の好成績ということになる。だがわたしは田舎にかつて性交の謎語^{なぞなぞ}があつたのを知っている。推測するにきつともっとたくさんの各種の歌謡があるだろう。みんなが大胆に採集することを望んでいる。たといかの“具合の悪い”ものであっても、我々は公刊しようとは思わないけれども、それをも蒐集網

羅して、特に書物に編訂して、専門家の参考に供したいととりわけそう思っている。だからさらにみんなが材料を提供し、この重大な難事業を完成することを望むのである。

我々は猥褻な歌謡の発生の理由について論じてみたいが、残念ながら考証の資料がなく、確かな根拠なく論断し、いつかまたの訂正を待つしかない。多くの人は詩が真正面からの心の声だと信じている。だから歌謡の猥褻は民間の風化の腐敗の証拠だと言う。わたしは決して風俗のために弁護しようとは思わないが、これは正確ではないと信じている。詩歌は作者の心情を表現するが、大抵は反映であって、決して本当の自白ではない。詩に「口は歌を唱っているが、ただ彼が口付けができない時だけ」と言うのがあり、最もおもしろく言っている。猥褻な歌謡の解説はだから別の方面からやらなければならない。わたしの憶測によれば、二つの点から説明することができる。その一は、生活の関係である。中国社会では禁欲思想はあまり勢力を占めてはいず、必ずしも反動を起こすとは限らないようだけれども、一般の男女関係があまり円満ではないことは、自明の事実である。我々は両性の煩悶が五四以後に起こり、田舎の夫婦は現在でもとても愉快地家庭生活を送っていると考えてはならない。このような煩悶は時と場所を問わずいずれも普遍的であり、田舎も独り例外ではない。蓄妾・女郎買い・私通、我々はこうした事実について当然非難しようとする、しかし我々が中産階級の蓄妾・女郎買い、農民の私通を見れば、これは必ずしも全く東方人の放逸によるとは限らず、少なくとも一半は自由な愛を求める動機*によるものだが、方法が間違っているだけだということを知らねばならない。猥褻な歌謡、私情を賛美する様々な民歌は、則ちそうした動機を持ちながら実行できない人が採る別に満足を求める方法なのである。彼らは貧しい生活を送りつつ富貴を希求しないでおれる、端正な生活を送りつつどうしても歓楽に耽けることはできない、そこで唯一の方法は淫を思うことである。それらの歌謡はすなわち彼らの夢であり、彼らの法悦(Ekstasia)である。実に全ての恋愛詩の起源はみなこうであり、いまはただ民歌の上に応用されているに過ぎない。

* [原注] これは当然そうした行為を弁護するものではない。ただ彼らの心理を説明しただけである。通行の俗歌に、「家の花は野の花の香しきに及ばず」と云う、つまり野の花は自由に選択することができるからである。

その二は、言語の関係である。猥褻な歌謡の起源はすべての恋愛詩と同じであるが比較してみると特に猥褻であるようだ、思うにこの原因は言語にあるはずである。『江陰船歌』の序でわたしはこう言ったことがある。「民間の原始的な道德思想が、もともと極めて単純なのは、怪しむに足りない。中国の特別な文字〔言葉〕は、特にこうした現象を引き起こす大原因である。長らく蔑視されてきた俗語は、文芸上の運用を経っていないので、細やかで曲折した表現力に欠けている。簡潔な高雅で古樸な五七言の句法は、民衆詩人の手には、また極めて不便で、それであの幼稚な文体に変わってしまい、なおかつ意味さえも巻き添えになってしまう。」これはまだ普通の情歌について言ったので、もしさらに一步進んだ歌詞ならば、自然ともっと目に障るだろう。だが内容を論ずれば、「十八拍」の劇本と祝枝山たちが作った細腰織足の諸詞^{iv}とべつにそれほどの違いはない。しかし文人が酒酣にして、艶曲を高吟して、おかしいと思わないのに、田舎の田植え歌を聴いて思わず顰蹙する、その理由は実に言葉の他には探しようがない。詞句が拙劣なの

は当然やはり一つの欠点である。しかし採集者と研究者にはこの事実ははっきり分かっており、それを少しは諒解でき、風雅の標準によって擯斥するまでにはならないので、ここでは特に丁寧に説明し、投稿の諸君が注意するよう希望する。

この小文はわたしが『歌謡』一周年増刊の求めに応じて、細々した時間を使って綴り合せたもので、だから全編に何の組織もなく、一篇の筆記に過ぎなくなった。わたしの目的はただ次のことを説明しようとしただけである、猥褻の分子は文芸上で極ありふれたことで、大騒ぎする値打ちがあるとは限らない、ただ性交を描写する措辞が拙劣なのは普通排斥される列に入る、——これも公刊から排斥されるだけだが、研究者にとってはやはり同様に貴重なのである、だから我々は猥褻な歌謡についても蒐集したく思い、かつ得難いがためにまたどうやら特別に歓迎されるようだ、と。我々はこうした貴重な資料を別に輯録して、学者の研究に供しようと準備している。わたしのこの閑談はこの歌謡類の蒐集のための一枚の広告に過ぎない。

(一九二三年十二月、北京大学『歌謡週刊』記念増刊。)

※初出：1923年12月17日『歌謡』“周年記念増刊”

i 「碧玉の歌」 『玉臺新詠』に見える。

ii 『南宮詞紀』六卷 『南北宮詞紀』(明)陳所聞編；趙景深校訂；中華書局上海編輯所編輯中華書局，1959.8がある。

iii 白徑天「柳州情歌百八首」、藍孕欧「平遠山歌二十首」、劉半農「江陰船歌二十首」いずれも『歌謡』に載った。「江陰船歌」については本書『江陰船歌』序を参照。

iv 祝枝山たちの諸詞 例えば『南宮詞紀』に載るものなどを言う。